

## 【親鸞部門(高校)・奨励賞】

相手の立場に立って

私立札幌大谷高等学校 第2学年 大倉心結

今年になって眼鏡をかけるようになった。フレームの内側だけがはっきりと見えるようになって、裸眼だと全然見えていなかったのだと眼鏡をかけて初めてわかった。

色眼鏡で見るという言葉がある。先入観をもって物事を見ることだ。眼鏡をかけている状態は、本当にこういう事に陥りやすいと思う。レンズがはまっているフレームの内側ははっきりと見えるが、逆にフレームの外側はぼやぼやとしか物が見えない。眼鏡をかける前のあまり視界の良くない私もちゃんと私なのに何もかもが良く見える方が「完璧」だと勘違いして眼鏡をかけた方が「良い私」なのだと盲信してしまう。

そうなるとすごく怖い。眼鏡をかけていない自分を否定することで、次第に正しい見え方をしている自分が正しいのだと考えはしないか？例え視界が悪くてもそれが一つの在り方、形で正しい正しくないにこだわってはいけないのだ。

でも逆に、正しい在り方や形がないから怖くもある。人の数だけ考え方や価値感があって、それを視界を通して心に作用させてる。これって偏見とまでは言わないが一種の「眼鏡」だ。

相手の立場に立つという言葉がある。相手の立場に立つ事で、相手の気持ちが分かったり、相手から自分がどう見えているのかがわかる。でもそれって私がかけている眼鏡から見た相手の立場だ。私の考え方とか価値感から作り出した相手の気持ち。もしかしたら相手の本当の気持ちに気付けていないのかもしれない。

だからこそ、本当に必要なことは「色眼鏡をかけないこと」じゃなくて、「自分が今かけている眼鏡を外してみること」だと思う。眼鏡を外すと、視界はぼやけるかもしれないけれどフレームの外側だった所まで、外側とか内側っていう区別を無くして見れるようになるから。